論文の内容の要旨

カラーチーの「ベンガリー」
― D 地区の「路上」から考える「女の子の安全保障」―

小野 道子

パキスタンのシンド州の州都であるカラーチー市には、市の人口の 10%以上を占めるものの、政府統計には表れない「ベンガリー」と呼ばれる人々が 200 万人以上居住している。この「ベンガリー」のうち大多数は、現在のバングラデシュ（1971 年までは東パキスタン）出身のベンガル人ムスリム（以下ベンガル人とする）であるが、ミャンマーのアラカン地方（現在のラカイン州）出身のムスリム（以下バルミー／ロヒンギャとする）も 25-35 万人程度含まれている。

カラーチーの「ベンガリー」ディアスポラは、1960 年代から 1990 年代にかけて形成された。カラーチーは、1947 年のインド・パキスタン分離独立以降、東西パキスタンの首都として、またパキスタン経済の中心として機能していた。東パキスタンは、人口過密である上に、西パキスタンに偏った経済投資や資源分配のため、貧困に苦しむ人々が多かった。そのため、特に 1960 年代以降、安定的な経済成長を成し遂げていた西パキスタンへの出稼ぎ移住が進んだ。1971 年 3 月以降の独立戦争を経て 12 月に独立が承認されたため、バングラデシュに帰国した人たちが多かったものの、独立後のバングラデシュ経済の混乱やサイクロンなどの自然災害の多発により、カラーチーへの移住は、1960 年代よりも 1970 年代以降、さらに増加した。また、1960 年代以降、ミャンマー政府によるアラカン地方のムスリムへの迫害が激化したことから、バングラデシュ（東パキスタン）に避難したアラカン地方のムスリムたちによるカラーチーへの移住も進んだ。パキスタン国内では、1979 年以降のアフガニスタン難民の受け入れ、1980 年代の外国移民に比較的寛容な移民政策の影響もあり、ベンガル人およびバルミー／ロヒンギャの人々のカラーチーへの移住は一層加速した。1990 年代後半以降は、人身取引問題の顕在化などによるインド・パキスタン国境管理の厳格化によって、新たな移住者は極めて少なくなっている。

「ベンガリー」の多くは、カッチー・アーバーディーと呼ばれる、水や電気、ガスなどのインフラなどが十分整っていない、カラーチーの中でも貧困者の多く住む地域、その中でも特に居住環境の劣悪な地域に住んでいる。カラーチーの「ベンガリー」の生活においての最大の困難は、CNIC（Computerized National Identity Card）と呼ばれるパキスタン国民であることを証明する身分証の取得である。パキスタンでは、2000 年代以降、テロの脅威などにより、身分証のデータベース化が行われるようになった。「ベンガリー」の中でも、1978 年 3 月 18 日までに旧パキスタン領土内（旧東パキスタンを含むが、ミャンマーのアラカン地方は含まれない）から移住した者であることを証明できる本人や親の出生証明書などがなければ、CNIC を得ることができない。バングラデシュやミャンマーに帰国することもできないため、CNIC を持っていなければ、実質的な無国籍状態となり、無償医療や子どもの教育、社会保障、移動の自由などを得られず、市民生活に支障を来たすことが多い。

本研究では、カラーチーの「ベンガリー」の中でも、「路上」で物乞いや物売りを行っている子どもたち（特に女の子）と、子どもたちを連れて、監視／見守りを行っている母親たちに着目した。不法移民や無国籍者として国家による安全を保障されていない「ベンガリー」の子どもたち、特に女の子たちや母親たちが、なぜ「路上」に出てくるのかという問いを出発点に、女の子や母親たちが「路上」や「安全・安心」をどのように捉えているのか、「人間の安全保障」の概念を応用して、総体としての「人間」や「子ども」ではなく、一人ひとりの視座に基づくウェルビーイングについて考えることを本研究の目的とした。

カラーチー市においては、近年、高架橋や地下道の建設などによって、「路上」で物売りや物乞いをする子どもたちが集まっていた信号機のある交差点が減っている。旧市街地では、テロ対策のため、「路上」で生活する子どもたちが寝泊まりしていた建物や公園などの警備が強化されていることから、「路上」で寝泊まりする子どもたちは減っている。そのような中、カラーチーの新市街地の高級住宅街である D 地区 G マーケット周辺には、ベンガル人やバルミー／ロヒンギャの子どもたちとその母親たちが集まる場所がある。筆者は、2017 年 7 月から 2020 年 2 月にかけて、断続的に現地調査を行い、複数のカッチー・アーバーディーに居住する「ベンガリー」と呼ばれるベンガル人、バルミー／ロヒンギャ、関係機関や団体などへの聞き取りを行うとともに、D 地区に集まる子どもたち（特に女の子）と母親たちに家庭での聞き取りを行った。

本論文は、序章、第 1 章から第 7 章、終章という構成になっている。序章で研究の背景と着眼点について述べ、第 1 章では、先行研究の整理から本研究の分析視角を提示し、研究の目的および研究の方法について述べた。第 2 章では、「人間の安全保障」研究において、本研究のキーワードとなる個々人の安全や安心がどのように扱われてきたのか考察した上で、「子どもの安全保障」と「女の子の安全保障」について論じた。第 3 章では、英領インド時代から 1990 年代後半に焦点をあて、パキスタン、バングラデシュ（旧東パキスタン）、ミャンマーのアラカン地方における国内および地域状況の変遷を踏まえ、ベンガル人やバルミー／ロヒンギャの移住の過程を明らかにした。センサスや文献からの客観的なデータと現地調査で収集した「ベンガリー」の人々の「語り」が交錯するところから紡がれる、

これまで注目されてこなかった、パキスタンにおけるベンガル人やバルミー／ロヒンギャの人々の移住の歴史を描くことを試みた。第 4 章では、カラーチーの「ベンガリー」ディアスポラの現在の暮らしに焦点を当て、カッチー・アーバーディーにおける「ベンガリー」の人々の暮らしと市民権をめぐる交渉について、ベンガル人とバルミー／ロヒンギャの人々の「語り」から描いた。第 5 章では、「路上」で働く子どもについての研究の国際的な動向について考察したのち、カラーチーの「路上」で働く「ベンガリー」の子どもの現状や法制度、NGO や政府による支援の取り組みについて分析した。第 6 章では、カラーチー市内の D 地区 G マーケット周辺に集う物売りや物乞いをする子どもたちとその近くで見守り／監視を行っている母親たちに焦点を当て、現地調査の結果と調査結果の分析を記述した。第 7 章では、第 2 章から第 5 章までの考察や分析と第 6 章の現地調査の結果と分析を踏まえ、「ベンガリー」という名乗りと名付け、「路上」が意味するもの、「ベンガリー」の女の子たち、母親たちにとっての安全・安心な居場所としての「路上」という 3 点から、「ベンガリー」の女の子たちの安全保障についての考察を深めた。さらに、ド・セルトーの「戦術」と「戦略」の概念を援用し、パキスタン政府の「戦略」の隙をついた人々の「戦術」によって、「安全共同体」が作られ、「人間の安全保障」や「女の子の安全保障」が達成される状況を明らかにした。終章では、本研究の結論と学問的貢献および政策的示唆をまとめた上で、本研究の限界と今後の研究の必要性についても言及した。

「ベンガリー」の女の子や母親たちが、なぜ「路上」に出てくるのかという問いに立ち返ると、彼女たちが最初に D 地区 G マーケット周辺の「路上」に出てきた理由は、生活困窮である。しかし、年月を経て、「路上」は、子どもたちが稼ぎ、母子が無料の食事をもらうための場だけではなく、子どもたちの稼ぎを頼母子講に入れることで貯金と投資ができ、より良い賃貸物件や新しい仕事、食品の配給などの情報を得られる場にもなっている。D 地区 G マーケット周辺の「路上」では、パルダ（女性を公的空間から隔離する社会慣習）のため、家の近所では外で遊べない女の子たちも友達と走り回り、家の近所でさえ自由に歩き回ることが難しい母親たちも、おしゃべりで息抜きができる。「路上」という公的な空間が、彼女たちの日常の居場所として変容している。D 地区の「路上」に通う女の子や母親たちが住む家や地域は、必ずしも彼女たちにとって安全・安心な環境ではない。そのような中で、「路上」に自らの「戦術」で「安全共同体」を作ることで、国家の保護や地域の支援がなくても「女の子の安全保障」が達成される状況を作り出している。

「人間の安全保障」研究の多くは、恐怖や欠乏、尊厳のない自由など、私たち外部の人間が考える脅威や不安全をどのように取り除けば「人間の安全保障」が達成されるのかという、いわば国際社会や国家からの目線で行われるものが多かった。しかし、本研究では、脅威や不安全ではなく、「ベンガリー」の女の子たちや母親たちが日常生活において何を安全・安心と感じているのか、当事者たちの視座に耳を傾けることで、保護される対象としての子どもや女性ではなく、彼女たち自身を安全・安心を作り出す主体として捉えた。